

放置自転車の観点からみる羞恥心・罪悪感の比較

1180428 小松 裕征

高知工科大学 マネジメント学部

序 論

「羞恥心」と「罪悪感」を同じものとしてとらえるか、または違うものとしてとらえるかという議論は現在でも心理学者の間で行われている。2000年代以前は恥と罪悪感の誕生してすぐにみられる怒りや悲しみなどのほかの感情とは質的に異なっていて、社会的、自己再帰的(self-reflexive)、自己意識的、もしくは自己評価的である(Ferguson, 1999)、規範を逸脱してしまったり人前で失態を曝してしまい集団や社会への適応が問われる「社会的苦境場面」という危機的場面があり、恥や罪悪感といった感情はそうした場面に直面する危機を知らせる警告信号としてはたつき、自己モニタリングの過程を促し、所属の欲求(Baumeister & Leary, 1995)を満たすよう集団や社会への適応へと個人を導く(Haidt, 2003)といったように、道徳的、内省的な感情としてひとまとめにされてきた。しかし研究が進む中で、罪悪感と羞恥心は全く異なる感情である、と提唱する者もいる。

Tangney (1993)は恥と罪悪感の苦痛の程度やそれらが生じた際の感覚についての調査を行い、恥は罪悪感に比べ苦痛を伴い、劣等感、身が縮むような感覚、他者から見

られている感覚、逃避願望が高いことを示した。Tangneyが研究結果を整理したものがTable 1である。Table 1によると、評価の対象が恥は全体的自己を対象とすることに対し罪悪感特定の行動を対象とすること、他者への関心のしかたが恥は他者による評価に関心を持つのに対し罪悪感他者への影響に関心を持つなど、いくつかの具体的な相違が恥と罪悪感の間にみられた。

私の行った研究は、今わが国で解決の難しい問題となっている放置自転車をテーマに、違反行為に対する感情の効果について考察したものである。本研究ではその中でも特に、「罪悪感」と「羞恥心」に着目した。近年増えている「罪悪感と恥は全く別の感情である」とする研究の代表である

Tangneyが提唱したTable 1に認められるような相違が正しいのかをあらためて確認するというものである。Tangneyの「恥は罪悪感と違い他者による評価への関心が原因で起こる」という先行研究から、「他者が見ている状況では自転車を放置しにくい」という仮説を立て、また自転車を放置する際に抱く感情と罪悪感、羞恥心に新たに相関がみられないかを検証するというのが目的である。本研究では、罪悪感を「ルールに違反したときに自分が自分を許せずに罪

	恥	罪悪感
評価の対象	全体的自己	特定の行動
苦痛の程度	相対的に強い	相対的に弱い
現象的経験	無価値感、無力感	緊張、自責、後悔
自己の操作	観察する自己と観察される自己の分離	自己は統合された状態
自己への影響	全体的な価値低下による自己評価の減損	全体的な価値低下を伴わない
他者への関心	他者による評価への関心	他者への影響に対する関心
反事実的過程	自己の一側面の心理的取り消し (undoing)	行動の一側面の心理的取り消し
動機的側面	逃避への欲求	告白・謝罪・償いへの欲求

Table 1 恥と罪悪感の相違 (Tangney, 1995)

の意識を感じてしまうこと」、羞恥心を「恥ずかしいと思う気持ち」と定義する。

方 法

分析対象者及び調査時期

本研究では当大学の学生 15 名(男性 11 名、女性 4 名)を対象とし、2017 年 12 月に調査を行った。

質問項目

質問項目は、(1)放置自転車をするうえで様々な状況を想定させる項目、(2)罪悪感喚起状況尺度(有光・今田, 1999)、状況別羞恥感情尺度(成田ほか, 1990)を用いて罪悪感、羞恥心の尺度を測定する項目の 2 種類を用意した。(1)に関しては、近くのスーパーまで買い物に来た際に駐輪場が満車で、他の駐輪場も現在地から 1km 離れている場合放置自転車をするか否かを想定させ、その際に①歩行者も他の放置自転車も無い状況、②歩道側に歩行者が多くいる状況、③他の放置自転車が多くある状況、④他の放置自転車も多いが歩行者も多くいる状況の 4 つの状況を想定させ、この状況で「どのくらいの確率で自転車を放置するか」を百分率で質問し、また自転車を放置したとして罪悪感や恥に関係する 7 つの尺度を新たに設定し、「1:まったくあてはまらない」から「5:非常にあてはまる」の 5 点法で質問した。

(2)に関しては、前述の罪悪感喚起状況尺度、状況別羞恥感情尺度を用い、それぞれ罪悪感、羞恥心をどのくらい感じるかを質問した。尺度の内容は「1:全く感じない」「2:どちらかといえば感じない」「3:どちらかといえば感じる」「4:非常に感じる」

の 4 点法である。

結 果

放置自転車をする感情の中の因子

(1)で得られた結果を探索的因子分析し、その分析結果を Table 2 に示した。信頼性係数は概ね.80 以上の値を示した。結果としては、どの状況においても「自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる」の尺度のみ第 2 因子に分かれ、それ以外の尺度は全て第 1 因子に分けられた。このことから、自分を良い人間だと言いつけさせる感情とそれ以外の羞恥心・罪悪感の感情に影響を与える因子は分かれているということが分かる。

場面ごとの感情と羞恥心・罪悪感との関係

罪悪感喚起状況尺度、状況別羞恥感情尺度の信頼性係数としては、それぞれ $\alpha = .883$, $\alpha = .748$ の値を示した。そこで Table 2 で得られた結果をもとに自分を良い人間だと言いつけさせる感情以外の感情に影響を与える因子を Factor1、自分を良い人間だと言いつけさせる感情のみに影響を与える因子を Factor2 として、4 つの場面ごとの各被験者のそれぞれの因子得点と、(2)の罪悪感喚起状況尺度・状況別羞恥感情尺度の得点の平均で得られた罪悪感・羞恥心の尺度得点で相関分析を行い、結果を Table 3 に示した。

その結果、罪悪感に関しては相関がみられなかったが、恥に関して全ての場面において Factor1 と正の相関がみられた。この質問では「自転車を放置することになった場合」前提での感情について質問をしている為、やむなく自転車を放置する必要性が出た場合に起こりうるこれらの感情は羞恥

心によって引き起こされるものであり、逆に「自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる」感情は羞恥心や罪悪感との相関はないという結論となった。

放置意図と羞恥心・罪悪感との関係

前述の場面ごとの感情の因子と同様に、4つの場面ごとの自転車を放置する確率と罪悪感・羞恥心の尺度得点で相関分析を行い、結果を Table 4 に示した。その結果、羞恥心に関しては相関がみられなかったが、罪悪感に関しては③他に放置自転車が多くあり歩行者はいない状態、④他に放置自転車が多くあり歩行者も多くいる状態と負の相関がみられた。この結果から、他に放置自転車が多くの状態では自転車を放置することに対する罪悪感が起こりにくいということが示された。

Table 2 場面ごとの感情の探索的因子分析

①歩行者なし, 他の自転車なし	Factor1	Factor2	共通性
放置したことが気にならない	-.994	-.005	.872
人の目が気になる	.906	-.047	.826
自分が嫌な人間だと感じる	.847	.110	.723
通行を妨げてしまい申し訳なく感じる	.841	.273	.767
ダメなことをしてしまったと感じる	.769	-.152	.622
言い訳させてほしい気持ちになる	.612	-.340	.503
自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる	-.020	-.996	.875

Factor1 の α 係数... .901

②歩行者あり, 他の自転車なし	Factor1	Factor2	共通性
通行を妨げてしまい申し訳なく感じる	.945	.100	.957
自分が嫌な人間だと感じる	.902	-.103	.772
放置したことが気にならない	-.888	-.014	.796
人の目が気になる	.850	.185	.844
ダメなことをしてしまったと感じる	.838	.057	.732
言い訳させてほしい気持ちになる	.619	-.487	.451
自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる	-.126	-.900	.890

Factor1 の α 係数... .913

③歩行者なし, 他の自転車あり	Factor1	Factor2	共通性
ダメなことをしてしまったと感じる	.930	.241	.915
人の目が気になる	.881	-.076	.785
自分が嫌な人間だと感じる	.840	-.118	.724
通行を妨げてしまい申し訳なく感じる	.833	.064	.696
言い訳させてほしい気持ちになる	.567	-.177	.357
放置したことが気にならない	-.114	-.091	.021
自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる	.077	-.933	.879

Factor1 の α 係数... .841

④歩行者あり, 他の自転車あり	Factor1	Factor2	共通性
ダメなことをしてしまったと感じる	.959	.196	.946
自分が嫌な人間だと感じる	.830	-.090	.703
人の目が気になる	.809	.002	.654
通行を妨げてしまい申し訳なく感じる	.781	.056	.610
言い訳させてほしい気持ちになる	.574	-.364	.476
放置したことが気にならない	-.264	-.057	.072
自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる	-.085	-.760	.581

Factor1 の α 係数... .837

Table 3 場面ごとの感情と罪悪感・羞恥心との相関分析

	場面①Factor1	場面①Factor2	場面②Factor1	場面②Factor2
羞恥心	0.54 *	-0.263	0.527 *	-0.148
罪悪感	0.403	0.014	0.397	0.239
	場面③Factor1	場面③Factor2	場面④Factor1	場面④Factor2
羞恥心	0.526 *	0.004	0.522 *	-0.118
罪悪感	0.093	0.389	0.331	0.291

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

④歩行者あり, 他の自転車あり	Factor1	Factor2	共通性
ダメなことをしてしまったと感じる	.959	.196	.946
自分が嫌な人間だと感じる	.830	-.090	.703
人の目が気になる	.809	.002	.654
通行を妨げてしまい申し訳なく感じる	.781	.056	.610
言い訳させてほしい気持ちになる	.574	-.364	.476
放置したことが気にならない	-.264	-.057	.072
自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる	-.085	-.760	.581

Table 4 放置意図の確率と罪悪感・羞恥心との相関分析

	場面①	場面②	場面③	場面④
羞恥心	-.325	.016	-.201	-.192
罪悪感	-.339	-.232	-.464 +	-.548 *

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考 察

場面ごとの感情と罪悪感・羞恥心の関係

恥に関してのみ全ての場面において Factor1 と相関がみられた。このことから、やむを得ず自転車を放置する際に起こりうる感情は羞恥心によって引き起こされるものであるということがいえるが、このことは Table 1 でみられる「自己への影響」に関連していると思われる。(1)での尺度は「ダメなことをしてしまったなと感じる」や「自分が嫌な人間だと感じる」など自己の価値の低下を表す内容のものであり、概ね Tangney の研究結果と支持する形となっている。

しかし、「自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる」尺度はある意味では自己の価値の低下を表すものであるにもかかわらず恥との相関がみられないなど、完全に Tangney の研究結果を支持しているとはいえない結果となった。このことについては前述の尺度と他の羞恥心と相関がみられた尺度に本研究では明らかにすることのできなかつた差異があると考えられ、研究の余地がある。

放置意図の確率と罪悪感・羞恥心の関係

罪悪感に関してのみ③歩行者がおらず放置自転車が少なくある、④歩行者も多く放置自転車も多くある場面において有意な相関

がみられた。これは Table 1 において「他者への関心」を支持する結果となったと推測される。罪悪感には他者に影響がある場合に喚起される感情であるため、他に多くの自転車が放置されているという状況から「大量に他の自転車が放置されているのだから自分が放置しても他人に迷惑はかからないだろう」と考えてしまい、結果として罪悪感をあまり感じなくなるのではないかと考えられる。

しかし、この結果は序論で立てた「場面③、④での放置意図の確率は羞恥心と負の相関を表す」という仮説は立証されず、Tangney の研究結果を支持しなかったことになる。Tangney が先行研究で示した「他者による評価への関心」には他者から見られるのを気にすることは含まれないのか、また含まれないのであれば「他者による評価への関心」はどの範囲をさすのかということに研究の余地が残る。

問題点および今後の課題

本研究は質問紙を用いた方法で分析・研究を行ったが、サンプル数が少なく研究としては不十分であったことが挙げられる。十分なサンプル数を確保したうえで再度分析を行えば「人の目を気にするため、放置意図の確率と羞恥心に負の相関がみられる」という仮説も支持される可能性がある。

また、先述のように「自分は本当は良い人間なんだと言いつけさせる」ことが自己の価値の低下を表すものではないのか、「他者による評価への関心」は具体的にどういったものであるかなど、新たに吟味しなければならない課題も残る結果となった。

引用文献

- 有光 興記 (2001) 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係 性格心理学研究 第9巻 第2号 71-86
- 有光 興記, 今田 寛 (1999) 特性罪悪感尺度作成の試み 日本教育心理学会第41回総会発表論文集 250
- 成田 健一, 寺崎 正治, 新浜 郁夫 (1990) 羞恥感情を引き起こす状況の構造 人文研究 (関西学院大学文学部) 40, 73-92
- 薊 理津子 (2008) 罪悪感と恥の研究の動向 感情心理学研究 第16巻 第1号 49-64
- Ferguson, T.J., Stegge, H., Miller, E.R., & Olsen, M, E. (1999) Guilt, Shame, and symptoms in children. *Developmental Psychology*, 35, 347-357.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (1995) The need to belong; Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Haidt, J. (2003) The moral emotions. In R.J.Davidson, K. R. Scherer, & H. H. Goldsmith (Eds.), *Handbook of affective sciences*. Oxford: Oxford University Press. pp.852-870.
- Tangney, J. P. (1993) Shame and guilt. In C.G.Costello (Ed.), *symptoms of depression*.
- Tangney, J. P. (1995) Shame and guilt in interpersonal relationships. In J. P. Tangney & K. W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp.114-139.

